カテーテル関連計画外抜去の実態調査

○長谷川 智之, 斎藤 真 (三重県立看護大学)

Survey of unplanned extubation related catheter

Tomoyuki HASEGAWA and Shin SAITO (Mie Prefectural College of Nursing)

1. はじめに

日本医療機能評価機構の報告によると、ドレーンおよびチューブ関連のヒヤリハットは、薬剤、療養上の世話に次いで3番目に多い¹⁾。厚生労働省は、計画外抜去事例の分析から、人員配置および職務環境に関する提案しているが、看護師不足の著しい日本²⁾では、早急に対策に取り組むことは難しい。これらの背景から、医療現場では計画外抜去予防に対し看護師が中心となり取り組んでいるが、計画外抜去の件数は減少していない¹⁾のが現状である。したがって、計画外抜去に対する看護師の実態把握および課題の明確化が早急に必要であるため、本研究に至った。

2. 方法

計画外抜去の実態に対するデータ収集は、自作の質問紙を用いて、①現在行っている予防を16項目から複数選択、②困っていることに関する18項目、③ニーズに関する12項目をそれぞれ4件法で実施し、④基本属性（性別、年齢、看護師経験年数）について回答を得た。①②③には自由記載を設けた。調査期間は平成27年8月末～9月末とし、研究対象者はA県の総合病院に勤務する看護師381名に依頼した。各質問項目について単純集計を行った。本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得た。

3. 結果

381名に配布し、305名(回収率80.1%)から回収が得られ、有効回答数は223名(有効回答率73.1%)であった。研究対象者の年齢は21～57歳に分布し、平均看護師経験年数は12.1±9.5年であった。

計画外抜去予防で現在行っていることは、「5. 抑制具(安全帯, ミトン, 予防衣)の使用」187人(83.9%)と最も多く、次いで、「3. 包帯などで刺入部を隠す」149人(66.8%)、「7. 患者を観察しやすい場所へ移動」147人(65.9%)であった。一方「6. 新たに考案した用具(アームカバー等)の使用」9人(4.0%)と最も少なく、次いで「13. モニター監視」23人(10.3%)、「16. 看護師への抜去予防の教育」28人(12.6%)であった。

困っていることは、「3. 意思疎通ができない患者に、カテーテル類の必要性を理解してもらうことが難しい」が3.8±0.5と最も高く、次いで「1. 計画外抜去に対して困ったことがある」が3.6±0.6、「12. 抑制をしても計画外抜去は起こる」が3.4±0.6であった。一方、「15. 病棟の雰囲気良くないため抜去に関する情報共有がしにくい」が1.9±0.7と最も低く、次いで「16. 抜去に関する情報共有をする時間がない」が2.1±0.7、「7. 計画外抜去のリスクを判断できない」が2.2±0.7であった。自由記載には、「認知症患者に対し理解を得ることは難しい」「リスク入力・報告で時間をとられて困る。時間外がそれで増えたりする」「治療を優先する場合、やむを得ないため抑制を実施するが、かえって興奮される場合がある」などの記載がみられた。

ニーズは、「5. 看護師を増やして欲しい」が3.7±0.5と最も高く、次いで「2. 抑制感がない用具を開発して欲しい」が3.4±0.7、「6. 家族の協力を得たい」が3.4±0.7であった。一方、「9. 勤務体制を変えて欲しい」が2.7±0.9と最も低く、次いで、「3. 計画外抜去のリスク判断基準が欲しい」が2.8±0.7、「12. 計画外抜去予防の知識提供の場が欲しい」が2.8±0.7であった。自由記載には、「スタッフの人数の増加による観察力の強化、家族への協力が必要と思われる」

図1 現在行っている予防

図2 困っていること

図3 ニーズ

「看護師に限らず看護助手でも増えたら、見守れる人員が増えて抜去予防につながるのでは」などの記載がみられた。

4. 考察

現在行っている計画外抜去予防において、抑制やカテーテル管理の工夫が多いことが明らかとなった。看護師は様々な患者に対応する必要があり、意思疎通が困難な患者にドレーンおよびカテーテル類の必要性を理解してもらえないことや、「治療を優先する場合、やむを得ないため抑制を実施する」や「倫理的にいかがなものかと葛藤しながら抑制を行っている」などの自由記載からも抑制はやむを得ず行われていることが現状である。また、看護師を増やして欲しいというニーズがあるが、看護師不足という現状において直ちに増員することは困難であり²⁾、他患者にケアが集中し、計画外抜去のリスクのある患者に対して観察をする時間が少ないために、抑制をして対応していることが考えられる。一方、カテーテル管理に関して、先行研究では³⁾、ミトンの改良やアームカバーでの刺入部の保護などの研究が多くされていることから、取り組みやすい予防であることが考えられる。以上より、抑制はやむを得ず行われており、抑制をしても計画外抜去が起こる現状から、「抑制感がない用具を開発して欲しい」というニーズが高くなったと推察される。したがって、人員をいかに確保するかや抑制感のない用具の開発が今後の課題であると考えられる。

参考文献

- 1) 公益財団法人日本医療機能評価機構医療事故情報収集等事業<http://www.med-safe.jp/>
- 2) 公益社団法人 日本看護協会 看護統計資料室 <https://www.nurse.or.jp/home/publication/toukei/>
- 3) 八木なつみ他：計画外抜去の危険因子と予防に関する文献研究，日本人間工学会東海支部2015年研究大会論文集，p14-15